

石田頼房『日本近現代都市計画の展開』  
自治体研究社 2004年4月 A5版 381頁 4000円＋税

千 歳 壽 一

「日本に都市計画はない」、「わが国の大都市は、鉄とコンクリートの無秩序な集積地である」等々、東京を始め日本の都市は、乱雑さや醜さを批難されている。たしかに、いくつかの有名な市街地開発を除くと、道路を作るだけで町並みを整えないわが国の都市計画は、ないに等しく見えるであろう。しかし、なにもして来なかったというのは皮相的な見方で、実は100年以上にわたって、様々な計画が提案され修正された歴史の積重ねなのである。時代の変化—社会、経済、国際環境—に従って変わる都市の機能・構造に対応し、その望ましいあり方に向けて、受容された範囲で制度が定められ、工事が行われて来たのである。

「日本近現代都市計画の展開」は、明治維新から現代に至るわが国の都市計画の流れを、詳細に記述した書である。日本の都市計画を情緒的、或いは特定の政治的立場から批判する書は少なくないが、本書は純粋に学術的な視点に立ち、日本の都市計画の推移を述べる数少ない一冊である。

著者は、1868年から2003年までの期間を都市計画の展開から、九つの時期に分けることができるとして、一つの時期にほぼ一つの章を当てている。

- 第1章 日本近現代都市計画史の時期区分と全体像
  - 第2章 欧米都市構築技術による封建都市の改造
  - 第3章 市区改正の時代
  - 第4章 都市計画制度の確立とその内容
  - 第5章 関東大震災と復興都市計画
  - 第6章 戦時下、都市計画の進歩の中断
  - 第7章 戦後復興期の都市計画
  - 第8章 高度経済成長下の都市開発と計画
  - 第9章 新基本法体系と現代都市計画
  - 第10章 反計画政策からバブル経済の崩壊へ
  - 第11章 21世紀の都市農村計画を展望する
- 第1章は導入部として、概要を述べて時代区分

の根拠を示し、全体を貫くキーワードを提示している。第2章は、明治政府が、近代国家としての体裁を整え不平等条約改正を進めようとして行った都市改造の内容と成否について述べている。以下各章、それぞれのタイトルの示すように、各時代における時代背景と都市計画の内容と成否を紹介するとともに、評価を加えている。第11章だけは、それまでの章と異なり、将来を展望しこれからの計画のあり方を考察している。

全章を通じて参考文献を十分に用い、事実を正確に記述し、問題の発生、対策の検討、制度化、その過程における利害の対立、圧力による改変をわかりやすく説明している。都市がそれ自体で単独に存在しうる地域ではなく、関連する他の地域との関係において存在するという構造の中にある地域であるため、都市計画は時代背景の中で対応しているのであるが、時代時代の背景と都市計画の対応を適切に記述している。

文章を読んでいると、都市の改良に腐心した先人に対する敬愛の情が滲み出ているのが感じられる。制度の移り変わりの背景や対応の結果が的確に整理され、評者のように渦中にあった実務者にとって、納得のいく纏め方と感心させられる。

複雑な局面に囲まれた都市とその改造の推移を漏れなく述べ尽くすことは困難に近く、外的条件などについて書き落としたように思われる点が多量ある。また、そもそも評者が当事者であることは、内面から真実がわかるとともに、思い入れに溺れる恐れをなしとしない。

最小限客観的にいえることは、・参考資料として一年表、索引、図表一、・教科書として一偏りが無い、技術中心でない一、・教科書として一平易な文章、ていねいな解説一、・研究の手引きとして一文献と説明が詳細一、都市研究者や都市に関心をもつ者の手元におく価値が高い書であるということである。

なお、あとがきで著者はこの書を、日本の都市

農村計画にかかわってきた恩師と夫人（お茶の水地理学会4回生）に捧げると記していることを、付け加えておきたい。